

懲罰中の悪役令嬢は一夜の過ちで

孤高の騎士団長様の専属に任命されました

序章

ずいぶんと、体がひんやりする。

そして頭がなぜだか、こりこりする。

ベッドはいつもより柔らかくふかふかで、シーツが妙に湿り気を帯びている気がした。

ルティエラは、痛む頭を押さえて目を覚ました。

頭も痛ければ、体も妙に痛い。豪華豪華な金の髪は寝乱れて、肩や背中にくるくとウェーブを描きながら落ちていく。最近最近は手入れが滞とどっているものの、白く美しい肌に、豊かな胸に引き締まった腰。すらりと長い足。

ややつり上がり気味の青い瞳をぱちりと瞬いて、ゆっくりとベッドから起き上がる。

「……？」

ここはどこで、自分は誰で、今は何時なのだろう。

こんなになにもかもがわからない目覚めは初めてだ。

昨日——久々の休みをもらえた。半年ぶりの休日だった。

『懲罰官ちやうばつかん』からお許しが出たのだ。

王国の労働基準から明らかに逸脱した働き方をしているルティエラは、半年の労働で疲れ果てていた。けれど、せっかくの休みである。給金も、少しだけれどもらえた。なので、本当に久々に外の空気を吸いに街へ繰り出した。

ああ、自由のなんと素晴らしいことか——と感動しながら、生まれて初めて酒場に入った。酒でも飲まなくてはやってられない、という言葉を城ではよく聞く。

ルティエラの立場は特別だが、それ以外にも城には激務で死にかけている者が多いのだ。

文官の方々からは、多忙のために二日寝ていないやら二日風呂に入っていないやらという話もよく聞く。

直接話を聞いたわけではない。城ではルティエラと会話を交わしてくれる者などほほいらない。掃除中に会話を耳にする程度である。

彼らは「酒でも飲まないとやってられない」と言う。

なるほど、それは私もそうだ——と、ルティエラは思った。

ルティエラの人生には、今まで酒を飲むという選択肢も、酒を飲まないとやってられないという考え方も存在しなかった。けれど、よくよく考えると、ルティエラはだいぶ前から酒でも飲まないとやっていられない人生を生きていた。

そんなわけで、酒でも飲まないとやっていられないルティエラは初めて酒場の扉をくぐったというわけである。

(そうだったわ。私、お酒を飲んだ)

ルティエラは十八歳だ。もう酒を飲むことができる。

ただ、飲んだことはなかった。飲んだことがなかったのに、口にしてみたら思いのほか美味しくて、懲罰官からもらった給金を全て使い果たす勢いで飲んだのだ。

そこまでは——覚えている。

「……ん？」

ベッドの上で起き上がり、つらつらと記憶を辿ると、途中で途切れた。

酒が美味しかったよりも後の記憶がどうにも曖昧だ。飲みすぎて倒れたのだろうか。

ふと視線を落とすと、豊かなふたつの胸が見える。

胸のあちこちに、小さな鬱血の痕がある。

「ぶつけた……？」

ずいぶん特殊なぶつけ方をしたものだ。

それに、ひんやりするはずである。全裸だった。もしかして、酔った勢いで脱いだのだろうか。

それとも暑かったのか。全裸で寝る習慣があるわけでもないし、昨日の自分はどうしたのだろうか。首をかしげる。

徐々に覚醒してくると、頭の痛みも治まってきた。

部屋を見渡す。窓にはカーテンがかけられている。部屋はまだ薄暗い。

壁掛けの時計は、午前五時を示していた。広く高級感のある部屋だが、部屋の中央にベッドが置かれた、まるで眠るためだけに存在しているかのような不思議な作りをしている。

テーブルの上には空の酒瓶が転がっている。グラスがふたつ。それから水差しに、水が入っている。

ルティエラはベッドから立ち上がる。喉の渇きがひどい。酒焼けなのか、ひりひりしている。水差しからグラスに水を注いで、一気に飲み干した。

どれぐらい眠ったのかわからないが、まったく眠った気がしない。

体を包むような倦怠感けんたいかんが残っている。裸体を見下ろすと、胸と同じく足の内側やら、腹にも鬱血の痕が残っている。

「……っ」

ふと、ベッドに誰かが寝ていることに気づいて、ルティエラは息をのんだ。

それは、男性であった。

深く目を閉じて、規則正しい呼吸を繰り返している。眠っているようだ。

たくましい体はなにも着ていない。ルティエラと同じく全裸だ。

浮き出た胸板に、硬そうな腹筋。腕も太く、彫刻のごとき美しい体つきである。

輝く金の髪に、引き締まった顎あご、形のよい眉。長い睫まつげが頬に影を作っている。

全てのパーツが正しい場所に置かれた人形のように、美しい男だった。

——知らない男である。

頭がごりごりしたのは、腕枕をされていたからだ。シーツが湿っていたのは。体に小さな鬱血の痕があるのは——

たらりと、太股の内側をなんらかの液体が伝った。

「まさか……」

ルティエラは青ざめた。

見ず知らずの美しい男と酔っ払って性行為をして、処女を散らした。

その上、なにも覚えていないなんて。

元公爵令嬢としてあるまじきことをしてしまったと、その場に崩れ落ちそうになる。

けれど、なんとか踏み留まった。崩れ落ちている場合ではないのだ。

ルティエラの休日はずいぶん前だけ。今日もお勤めがある。今から急いで城に帰ればきつと、仕事に間に合う。

ルティエラは散らばっている服を静かに素早く身につけた。

そして、眠っている男に心の中で謝って——部屋を後にしたのだった。

「遅れまして、申し訳ありません」

「酒臭い」

ぜえぜえと肩で息をしながら城に到着したルティエラは、与えられている使用人用の部屋に戻り、急いでメイド服に着替えて髪を整えた。

豪奢な美人であるルティエラとメイド服の組み合わせは妙にちぐはぐだが、これが制服なのだから仕方ない。着替え終わると、急いで懲罰官のもとへ向かった。

開口一番に謝罪をするルティエラを一瞥して、懲罰官クレスルードは不愉快そうに眉根を寄せる。

「朝まで酒を飲んでいたので、ルティエラ。……それはどうした。虫にでも刺されたのか？」

黒髪を後ろに流して眼鏡をかけた、いかにも怖そうな青年クレスルードは、ルティエラの首筋を指差した。

「ええ、虫に。昨日の夜は暑かったです」

「涼しかったが」

「暑かったのです、酒場にいましたので」

「ひとりです？」

「ひとりです」

まさか知らない男とふたりで、性行為をしてしまったとは言えない。

クレスルードはごまかすルティエラを胡散臭そうに睨んだが、それ以上追及はしなかった。

懲罰官のいる懲罰局が、ルティエラの仕事場である。

懲罰局とは、城で働く者たちに罰を与えるための部署だ。たとえば酒を飲んで暴れたとか、無断欠勤が多いだとか。メイドに手を出したとか、浮気をして採め事を起こしたとか。

そんな投獄するほどの罪ではないと判断された者たちの、生活を正すことを目的とする。

労働は、城での雑務が主だ。朝の八時から夕方六時まで。懲罰の期間を終えるまでは年中無休である。基本的には無給で、数週間ほど働けば罪を許される。

けれどルティエラの場合は違う。

——ルティエラ・エヴァートンは、言うなれば愾氣の罪で五年間の懲罰中であった。

今日の業務を書いた紙をクレスルードに渡されて、ルティエラはふむふむと内容を確認した。正直疲れているし眠いのだが、そんなことは言っていられない。

これはただの仕事ではなく懲罰だ。一日休めば、懲罰の期間が三日増える。

さすがに病気や怪我なら休みをくれる程度の人の心はあるが、二日酔いや寝不足で休みたいなど論外である。

三日ぐらい増えたところで——と思わなくもないが、塵も積もれば山となるのだ。

ルティエラは五年間働かなくてはいけない。自由の身になれる頃には二十三歳になっている。それ以上懲罰期間が延びるのは遠慮したいところである。

「今日はお掃除と草むしりだけでいいのですね」

「もっと増やしてほしいのか？」

「いえ。ありがたく働かせていただきます」

いつものようにモップとバケツを持って、掃除に向かう。

もちろん広大な城をルティエラひとりで掃除することはできないので、一日の担当箇所はきちんと定められている。

クレスルードに見送られて、城の一階にある懲罰局が出る。

ちなみに、懲罰局は文官府などと違って人数が少ない。懲罰官はクレスルードを含めて五人。現在懲罰を受けているのは、ルティエラひとりである。

途中で他の懲罰対象者がやってきて、皆、ルティエラを残して先に任期が明けてしまうのだ。ルティエラひとりのために懲罰官が五人もいるのは無駄なので、懲罰対象者がいない時、懲罰官は騎士団で働く。懲罰局というのは、騎士団の部署のひとつなのである。

現在の懲罰局は、クレスルードとルティエラのふたりきり。

できればもっと優しい懲罰官が残ってくれたらよかったのに、と思わなくもない。

クレスルードという人は、無愛想で怖いのだ。それにルティエラのことを悪女と言って、とてつもなく嫌っている。まあ、それは仕方ない。クレスルードの心情も理解できるので、構わないのだが。

「今日は、裏庭の草むしり。それから、一階の東廊下のお掃除」

本日の業務をぶつぶつと呟いて確認しながら、ルティエラは東廊下へ向かう。

城は広すぎて、使用していない場所も多い。一階の東廊下などはその筆頭で、誰もいないしなにもない場所なのだが、城というのは国王陛下がおわす場所なのだ。使つていようがいまいが、綺麗にしておかなくてはならないのである。

裏庭の井戸で水を汲み重たいバケツを持って東廊下に辿りつく。どこまでもきりがないほどに長い廊下が続いていた。左壁に並ぶ窓からは光が差し込み、右壁には使われていない部屋の扉が整然と並んでいる。

ルティエラは粉石鹼を床に撒いて、モップを湿らせ、黙々と掃除をはじめた。

半年前はおぼつかなかったモップ捌きだが、今はだんだん様になってきている。

「あと四年と半分。もう少しね」

掃除をしながら自分を励ました。

半年は、あつという間だった。だからきつと、四年と半年もあつという間だろう。

——半年前。それまで、ルティエラはエヴァートン公爵家の長女として優雅に暮らしていた。

ルティエラの両親は厳しく、公爵令嬢としての完璧さをルティエラに求めた。ルティエラが生まれた時にはもう、王太子アルヴァアロとの婚約が定められていたからである。

幼い頃の記憶は公爵令嬢としての教育と王妃教育でほぼ占められている。

特に不満はなかった。疑問も抱かなかった。

生まれてからずっとそれが当たり前だったので、そういうものだと思っていた。

公爵家に生まれ、王太子の婚約者になったのだから、厳しく躰けられて当然である。

そうして頑張るうちにルティエラは『エヴァートン家の花』と呼ばれるようになっていた。

アルヴァアロは、激しい愛情や熱情などはないものの、ルティエラを婚約者として扱った。ルティエラもまた王妃教育に則り、『正しい』婚約者としてアルヴァアロのそばにいた。

その関係が崩れたのは、ルティエラが十六歳の時だ。王立学園に入学して間もなくのことである。

聖女が見つかったのだと、王国は騒然となった。

聖女とは、豊穰の女神セレニアの祝福を受け、天候を操る力を持つ者のことだ。

よき時に雨を降らせ、よき時に晴れを与える。

その力は王国全土には及ばないまでも、旱魃の村に雨を降らせ、大雨や嵐を鎮めることができる。

天候は、農民たちにとつての死活問題である。そして農民が潤わなければ、領地も枯れる。当然、貴族たちにも影響が出る。

聖女とは、その祝福を授けた女神の名の通り、王国に豊穰をもたらす存在であった。

聖女クラリッサは無名な男爵家の令嬢だったが、聖女であることが判明してから、アルヴァアの庇護下に置かれるようになった。

その時クラリッサとルティエラは王立学園の一年生で、アルヴァアは二年生。

ルティエラは学園で、ふたりの仲睦まじい姿を嫌でも見るようになった。

だが、特に怪気を燃やしたりはしなかった。ルティエラも聖女の大切さを重々承知している。その大切な聖女が次期国王になるアルヴァアと良好な関係にあることは、国にとつて素晴らしいことだと理解していた。

ただ、二、三度、クラリッサには注意をした。

彼女がアルヴァア以外の、婚約者のいる男性と親しくしたり、ふたりきりで過ごしたりするのを見ると、「それは淑女としては恥ずべき行為ですので、よろしくありません」と指摘した。

もちろん聖女には敬意を抱いている。聖女に注意をするとは烏^カ澁^シがましいことだ。けれどルティエラは、そうしなくてはいけなかった。

クラリッサが親しくしていた男性たちは、ルティエラの友人たちの婚約者だったからだ。友人たちに「ルティエラ様、どうか助けてください」と泣きつかれては、とても放っておけなかった。

クラリッサに注意ができるのは、アルヴァアの婚約者であるルティエラぐらいのだから。

忠告をすると、クラリッサは泣きそうな顔をした。叱られることに慣れていないのだろうと、ルティエラは思っていた。

それからすぐにアルヴァアに『クラリッサが泣いていた。彼女を傷つけることは許さない』と叱責された。ルティエラは素直に謝罪をして、友人たちに自分の無力を詫^わびた。

そして、二年。

アルヴァアのクラリッサへの傾倒ぶりは、日に日に強くなる一方だった。

夜会にも王家の式典にもクラリッサを伴い、ルティエラは捨て置かれていた。

父からは『なにをしているのだ。お前は王妃になるのだぞ』と叱責されたが、どうすることもできなかった。離れた心を繋ぎ止める術を、王妃教育では教わらなかったからだ。

——もともとアルヴァアの心など、ルティエラのもとにはなかったのかもしれないが。このままアルヴァアと結婚しても、きつと幸せにはなれないだろう。

そんな風に思いながら、ルティエラは王立学園の卒業式典に向かった。

王立学園の在学期間は三年。一足先にアルヴァアが卒業を迎える。それを祝うのも婚約者であるルティエラの義務だった。といつても——アルヴァアのそばには常に、クラリッサがいるのだが。

それでも義務は義務だ。顔を見せないという選択肢は、ルティエラにはない。

そして王立学園の式典用の大広間に顔を出したルティエラは——王太子の卒業を祝うために集まった貴族たちの前で、アルヴァアに罪を突きつけられた。

「ルティエラ。お前は聖女クラリッサに数々の嫌がらせをしていたそうだが、それは本当か？」

身に覚えがなかったので、ルティエラは戸惑いながら正直に「存じません」と口にした。すると今までルティエラの友人だと思っていた令嬢たちが、次々と口を開いた。

「ルティエラ様がクラリツサ様の教科書を燃やしたのです」

「ルティエラ様がクラリツサ様の制服をハサミで切ったのです」

「靴にゴミを入れるところを見ました」

「靴を池に投げ捨てているところを見ました」

身に覚えのないことだらけである。

驚くルティエラの前で、クラリツサがさめざめと泣きだした。

アルヴァロは冷たい目でルティエラを見下ろし、それから悲しげに目を伏せて首を振った。

「確かに私は、クラリツサに心を奪われてお前を蔑ろにしていた。だが、そのような嫌がらせをするなど、人としてあるまじき行為だ」

「私は、なにも……!」

「クラリツサはずっと苦しんでいた。その苦しみを、お前も味わうべきだろう。婚約は破棄する。お前には五年間の懲罰を与える。労働に励み、その歪んだ性根を入れ替えるがいい」

なんと寛大なのだと、アルヴァロは皆から称賛された。

聖女を虐げた悪女を投獄せず、懲罰で留めたのである。

ルティエラの言葉を、誰も聞きはしなかった。無実の罪を着せられたルティエラを、両親さえ信じてくれなかった。

公爵家から捨てられるかたちでルティエラはエヴァートン姓を奪われ、ただのルティエラになつた。

——けれど、案外、落ち込まなかつた。

懲罰局での仕事は確かに大変だが、寝る間もないほどの王妃教育や、両親からの重圧や、アルヴァロとクラリツサの仲睦まじさを見せつけられて捨て置かれる日々比べれば、ずっと気楽だったのである。

それでも、やはり疲れは溜まる。酒を飲んでばあつとしてしまったのは、失敗だった。

「お酒は美味しかったけれど……」

まさか自由の翼が生えずぎて、見知らぬ男と一夜の過ちを犯してしまうなんて。

真面目に生きてきた今までのルティエラでは、考えられないことだ。

あの人は一体誰だったのかと、午前中の廊下掃除を終えて懲罰局に戻ったルティエラは、ぼんやり考える。

王妃教育を受けていたので、ルティエラは性行為の知識をきちんと持っている。

それによれば破瓜とは非常に痛く、翌日にも痛みが残り、熱が出ることもあるのだとか。

けれど、怠さと眠気があるものの、ルティエラは元気だ。

体に残されていた赤い痕はキスマークというもので、量を考えてと昨夜はかなり激しかったといふことがわかる。

それでも痛みがないのだから、ルティエラの相手だったあの男性は、ものすごく性交渉が上手い

のだろう。

性行為にも上手い下手があるらしい。

王妃たるもの、夫がどれほど下手だろうが、男根が小さかろうが、気持ちいい振りをしなくてはならない。世継ぎを残すのが王妃の役割だからと教わった。

「ふふ……」

今思えば、変な授業である。当時は真面目な顔をして授業を受けていたのだから、おかしなものだ。

体を交える男性は、アルヴァロただひとりだと思っていたのに。

そんな自分が見知らぬ男性と過ちを犯してしまうなんて、なんだか面白い。

あの人は綺麗な顔をしていて、とてもたくましかった。

それに性行為が上手いともなれば、もしかしたら男娼かなにかかもしれない。

ルティエラがそうであるように、王国には金の髪をもつ者が多い。

金髪がごく一般的であるので、髪色だけで人を区別することは不可能に近い。

——まあ、二度と会うこともないだろう。

「なんだ、悪女。機嫌がよさそうだな」

「はい。昨日初めて飲んだお酒が、とても美味しかったです」

ルティエラには昼休憩が与えられている。とはいえ自由はないので、懲罰局で出された食事を食べなくてはいけない。大体が野菜スープとパンである。

食事がいただけるだけでありがたく、もともと、貴族時代には大量の豪華な食事をあえて残すという生活が苦手だったルティエラにとって、懲罰局の量の少ない食事は合っていた。

ルティエラの席から少し離れた場所で、ナイフで肉を切って食べているクレスルードが、訝しげな顔でルティエラを見ている。

「クレスルード様が話しかけてくださるのは珍しいですね」

「別に、悪女と話したいとは思っていない」

城には、クラリッサ信者が多い。

なんとといっても聖女であり、アルヴァロの婚約者である。近々正式に結婚をし、その暁にはアルヴァロは国王トラスから王位を継いで、即位することになっている。

ルティエラは聖女を苦しめた加害者である。クレスルードに嫌われているのは当然だ。

弁解をしようとは思わなかった。

誤解が解けて許されてしまえば、元に戻ってしまいかもしれない。アルヴァロの婚約者に戻りたくもなければ、エヴァートン家に戻りたいとも少しも思わない。

それにどのみち、クラリッサは聖女で、アルヴァロと愛し合っている。

ルティエラにはもう居場所がない。——それは、言い訳かもしれない。ともかくルティエラは、あの苦しくて窮屈な生活には戻りたくなかった。

「……なにを飲んだ？」

「酒場で、麦酒を五杯。果実酒を四杯。それから、樽酒を二杯です。おつまみのフィッシュフライ

が美味しくて」

「ひとりです？」

「ひとりですよ」

途中までひとりだった。そのうち、「いい飲みっぷりだ!」「しかも美人だ!」と、男性たちが酒を奢もてってくれた。酒場というのはい場所だ。

「半年後にまた、お休みをいただけるのでしょうか。また行きたいです、酒場」

「——ふん。悪女のくせに浮かれるなど。烏譚がましい」

忌々しげにクレスルードに言われて、ルティエラは、なるほどそうかと反省をした。

懲罰を受けている罪人の自分が、酒を飲んで浮かれるなど——本来は、してはいけないのだ。そういうことがあったとしても、楽しかったという態度を露わにするのはいただけない。それは不義理である。

クラリッサはルティエラのせいで傷ついている。ルティエラの五年間はクラリッサへの贖罪しんざいの間である。

「申し訳ありません。確かに浮かれていました。久々のお休みで、少し羽を伸ばしすぎてしまったようです」

「お前には伸ばす羽などありはしない。半年にわたる懲罰で、病気になるだけでも困る。そのために取ることを許可した休暇で酒場に行くとは。さすが悪女は考え方が違う」

「それもそうですよね。気をつけます」

クレスルードの言うことは、もつともである。

クレスルードとは懲罰局で初めて出会った。クレスルードと半年間を過ごして、彼が王家への忠誠心が厚い真面目な男だと、ルティエラは理解している。ルティエラの罪について耳にして、嫌悪感を抱いているようだった。直接関わっていない者まで、ルティエラの罪は広く知られていた。今では多くの民たちにも悪女ルティエラの噂が広がっている。

ルティエラの断罪に直接関わった者は、ルティエラとクラリッサと、アルヴァロ。それから、ルティエラに罪を押しつけた友人たちだけだ。

そう——罪を押しつけられたのである。

後々わかったことだが、クラリッサは実際に嫌がらせを受けていたらしい。

そして、それはおそらく、ルティエラの罪を糾弾した友人たちが行っていたことだ。

ルティエラはそう思っている。それ以外に考えられなかった。なぜなら彼女たちは、ルティエラの罪について、やけに詳しかったのである。

思えば——彼女たちはクラリッサを嫌っていた。

男爵令嬢の分際でと、よく言っていたし、彼女たちの婚約者とクラリッサが親しくしていたこともあり、余計に嫌悪感が強かったのだろう。

それがどうしてこうなったのか。どれほど考えても、わからない。

考えられるのは、ルティエラもまた嫌われていて保身のための贖あがなにされたということだが、真偽は知れなかった。

どのみちもう終わったことだ。考えても仕方ない。

食事を終えたルティエラは立ち上がる。スープとパンの入っていた食器を、一階にある使用人のための食堂に返さなくてはいけない。ついでだからとクレスルードのものも受け取った。

両手に食器を持って懲罰局を出ようとすると、見上げるほどに背の高い男とすれ違った。

黒衣の男である。軍服にマント。腰には立派な剣。太い首にむつつりと閉じられた口元と、余計な肉のついていない顎。

王国人特有の金の髪をしている。その素顔は誰も知らないと言われていた。

——彼は、常に目元を全て覆う仮面をつけている。

(レオンハルト様だわ……)

ルティエラは一步下がって礼をした。懲罰局になんの用なのだろう。確か——レオンハルトは長らく、辺境での反乱の平定に向いていたはず。

(私には関係のないことよね。それよりも、仕事に行かないと……)

ルティエラはそそくさと懲罰局から出て、食堂へ向かった。

レオンハルトはクレスルードと話があるのだろう。その仮面の下の視線がどうにも突き刺さるようにルティエラに向いているような気がしたが、きつと気のせいだ。

ルティエラは食堂に辿りつくと、給仕係の女性に礼を言いながら食器を返した。

「ありがとうございます、ごちそうさまです」

ルティエラが礼を言うと、食堂の給仕のご婦人は無愛想ながら「午後も頑張るんだよ」と声をか

けてくれる。それがとてもありがたく、ルティエラは微笑み、そして頭を下げた。

公爵令嬢だった時は、できなかったことだ。貴族は庶民に声をかけてはいけない。使用人は同じ人間ではないのだからと、礼を言うのも禁止されていた。なんて不自由だったのだろう。今は皆に嫌われているが、声をかけるのはルティエラの自由だ。

食事を支度してもらったら、礼を言っている。世話になったら礼を言っている。

それはとても自由で楽しい。

惜しむらくは、大抵の場合誰もルティエラの相手をしてくれないこと——

ルティエラは午後の仕事を行うために、裏庭に向かう。

城の裏庭には放置された花壇があり、雑草がはびこっている。草むしりは何度か行っているが、裏庭は敷地ばかりが広大で捨て置かれている場所のために、一日二日ではとても終わらない。草を集めるための木桶を持つと、裏庭に続く屋根のあるエントランスから裏庭へ降りた。

(酒場では、皆が私を受け入れてくれたわね。私がルティエラ・エヴァートンだと知らないからだわ)

悪女ルティエラの名前は広く知れ渡っているが、顔立ちまで知る者は、庶民たちの中にはほとんどいない。金の髪も一般的で、ルティエラという名前もそう珍しいわけではない。

庶民と同じ——それよりも質素な服を着て、にこにこしながら酒を飲んでいるルティエラを、悪女ルティエラ・エヴァートンと思う者などほほえない。

(だから、見知らぬ男娼の方と、一夜を共にできたのね)

裏庭にしゃがみこんで草むしりをしながら、ルティエラは昨日のことを考える。

今日はずっと、そのことばかりを考えている。

(できれば、覚えていたかったな)

一夜きりのことだとしても、深く愛されたかもしれないのだ。

それはどんな感覚なのか、覚えていなかった。忘れてしまったことが残念でならない。

驚きはしたものの、そう悪い経験ではないような気がしている。

ルティエラはもう貴族ではない。一夜の過ちを咎める者は誰もいない。

もう、誰もいない。すがすがしいほどに、ひとりだった。

タンポポなどの根は、頑丈で、抜けにくく、途中でちぎれてしまう。ひげのように細い根を持つ雑草のほうが抜きやすいと思いつながら手を泥だらけにしていると、声をかけられた。

「ルティエラ様。草むしり、大変ですね」

誰だろうと振り向くと、そこには侍女たちを引き連れた聖女クラリッサがいた。

王国人としては珍しい、青髪の女性である。

明け方の空を思わせる深い青髪と空色の瞳は、天候を操る聖女の容姿としてふさわしく、明るく無邪気に皆を照らす様はまるで太陽のようだと言われている。

ルティエラは地面に膝を突くと、礼をした。

今の立場は、クラリッサは聖女、ルティエラは庶民である。同じ目線で話をすることは許されていない。これは別に卑屈になっているわけではなく、余計な面倒事を起こさないための保身術である。

ある。

以前一度声をかけられた時に立ち上がったら、「聖女様に危害を加えるつもりか」と、彼女の護衛や侍女たちに責められたのだ。それ以来、気をつけるようにしている。

「エヴァートンの花とまで言われたルティエラ様が、そのような使用人の服を着て、手を真っ黒に汚して草をむしっているなんて、おいたわしいことです」

同情するように、クラリッサは言う。

彼女の取り巻きたちは口々に「さすがは聖女様、お優しい」「ご自分を虐めた悪女にさえ同情するなんて、なんと心が広いのでしょうか」と褒めそやした。

クラリッサがなにをしながら来たのかぐらいい、ルティエラにはわかる。

あれは、一カ月ほど前に遡るだろうか。ルティエラは今日と同じように裏庭で草むしりをしていた。それはよく晴れた日のことで、日差しが少し暑いぐらいだった。

その日唐突にルティエラのもとに現れたクラリッサは、「ルティエラ様、お暑い中お可哀想」と言つて、裏庭に雪を降らせたのである。

ルティエラは消えない雪の中で草をむしらなくてはならず、手が凍えて感覚を失うぐらいだった。多分、嫌がらせである。クラリッサはルティエラが自分を虐めたのだと思っている。

立場が変わった今、クラリッサは学園で受けた仕打ちを恨み、ルティエラに復讐をしているのだらう。

ルティエラはそれを誰にも言わなかった。言ったところで、クラリッサを虐めたお前が悪いのだ

という結論にしかない。

ルティエラの望みは、ただひとつだ。肅々と刑期を終えて、城からも立場からも自由になること。それだけである。

「そうだわ。ルティエラ様、その汚れた手を、洗い流してさしあげますね」
くすくすと、クラリッサは笑った。

その途端、クラリッサたちのいる場所は晴れているのに、ルティエラの周囲にだけ、大粒の雨がざああつと降りだした。

「それでは、頑張ってくださいね」

さすがはクラリッサ様。お優しいクラリッサ様。

相手は悪女なのですから、雷でも落としてさしあげればいいのに――

そんな声が、足音と共に遠ざかっていく。

ルティエラは空を見上げる。

聖女の力で降らせた雨だが、雨は雨だ。

ルティエラは雨が好きだ。雪も嫌いではない。晴れの日も曇りの日も、ルティエラの心に影を落とさない。

「ふふ……」

確かに雪の中での草むしりは大変だったが、苦しいばかりの日々に比べればたいしたことではない。

雨は、湯浴みさせることができずに朝から働いているルティエラの体の汚れを落としてくれるように、心地がいい。

目を閉じて、微笑んだ。

体が濡れて、メイド服が重くなった。髪が乱れて、額や首に張りついた。

両手を広げて笑っていると、新しい足音が近づいてくる。

「大丈夫か?」

ルティエラのそばまで真っ直ぐに走ってきた男が、ルティエラの体を抱えるようにして雨の中から晴れた場所へ強引に連れていった。

驚いて目を見開く。睫に雨の雫がついているせいでぼやけた視界に映ったのは、先ほどすれ違った仮面の騎士団長――レオンハルトだった。

レオンハルトは強引にルティエラの手を掴むと、雨から逃れるために屋根のあるエントランスへ連れていった。それから自分のマントを外し、ルティエラを包んだ。

ルティエラは戸惑いながらも、まさかその手を振り払うわけにはいかず、大人しくしていた。レオンハルトのマントはルティエラをすっぽり包み込むぐらいに大きく、ルティエラの体格ではずるりと床に届いてしまう。濡れてしまうし、汚れてしまう。けれどレオンハルトはまったく気にしていないようだった。

数歩離れた場所では、雨が降り続けている。

大粒の雨は、雲もないのに晴れた空から唐突に落ちてるように見えた。

裏庭に水溜りを作り、青々と生える葉から雫を滴らせている。

「この雨は、聖女か？ 酷いことを」

「……言葉を話すことをお許しください、騎士様」

「無論だ」

「ありがとうございます。これはただの雨です。今日は凍えるほどは寒くないですし、雨は気持ちいいぐらいですので、ご心配には及びません」

仮面の向こう側の瞳に、ルティエラは微笑んだ。

ルティエラは本当に大丈夫なのだ。レオンハルトに心配をしてもらう必要はないし、そんな立場にもない。マントは、あたたかくて心地いい。けれど高貴なレオンハルトの衣服を汚してしまうことの方が気になってしまう。

レオンハルトの瞳は、金の縁取りのある黒い仮面で覆われている。

仮面舞踏会のそれに似ているが、それよりも強固で頑丈に見える。

仮面は感情を隠してしまうが、レオンハルトがルティエラを心配してくれているのは、十分に伝わってくる。

「感謝いたします、騎士様。こんなによくしていただいたのは久しぶりです。下賤な私が騎士様のお召し物を汚してはいけませんから、どうかお構いなさらずに」

「下賤など……君は、エヴァートン家の令嬢だろう」

「今はもう、家名を失い、ただのルティエラです」

それに、罪人でもある。

親切は本当に、泣きたくなくなるぐらい嬉しいけれど、雨ぐらいなんてことはない。

服は洗えば綺麗になるし、干せば乾くのだから。

「仕事をおろそかにすると、懲罰が三日延びるのです。草むしりの仕事が残っていますので、どうか、離してくださいますか？」

「雨は、やむのか」

「聖女様のお心次第です」

「俺が直接掛け合おう。王太子と、聖女に」

「それはいけません。騎士様、私は悪女なのですよ。きっと、悪女に誑かされたと言われます」

ルティエラはレオンハルトから離れて、マントを丁寧たじろに肩から外すと、彼に返した。

それから深々とお辞儀をして、雨の中に戻る。

せっかくの親切を拒絶してしまうのが、心苦しい。だが、レオンハルトの手を煩わづらわせるわけにはいかない。

クラリツサはルティエラを恨んでいるのだ。火に油を注ぐ結果になることは明白だろう。

レオンハルトの立場も危うくなるかもしれない。

ルティエラはアルヴァアの婚約者時代に、レオンハルトと面識があった。

レオンハルト・ユースティス。

王の剣と呼ばれる、オブシディアン騎士団の騎士団長である。

ユースティス公爵家の長男で、騎士団長になると同時に家督を継いで公爵になったと聞いた。年齢は確か二十四歳。若き騎士団長だ。

人前に出る時は顔半分を仮面で覆っている。理由はわからない。

若いがゆえに侮あはれるのを嫌っているのだとか、見られないほど醜みにい顔をしているのだとか、目になにかしらの病気があるのだとか——色々な噂はあるものの、それは噂に留まっている。

姓をなくした今のルティエラにはもう関係のないことだが、ユースティス公爵家とエヴァートン

公爵家は中央の政治を巡って敵対関係にあった。

ユースティス家は、ルティエラがアルヴァアの婚約者になることに、最後まで異を唱えていたそうだ。

ルティエラが初めてレオンハルトに挨拶をした時は、臣下の礼をされただけで言葉を交わすことはなかった。

エヴァートン家の女だから嫌われているのだろうと考えていた。だが、後から聞いた話では、レオンハルトはたいそうな女嫌いなのだそうだ。ルティエラだから嫌っていたというわけではない。恋人の噂もなく、女性を近づけない。

レオンハルトになんとか近づこうとする女性は後を絶たない。だが、どのような女性であろうと「迷惑だ」「近づくな」の一言で切り捨てる。

贈り物は受け取らず、騎士団に直接届けられたものは全て焼却炉へ投げ込んでしまうのだという。それでも誰より強く優秀で、国王トーラスの信頼も厚い。

そんな前途有望なレオンハルトの経歴を、あと四年と半年もすれば城からいなくなる——おそらく王都からも去り、どこかの田舎町でひっそり暮らすことになるはずのルティエラが、穢けがしたりしてはいけない。

そんな思いから距離を置いたのだが、レオンハルトは渡されたマントを腕にかけると、雨の中で草むしりをしているルティエラに近づいてくる。

「騎士様、濡れてしまいます」

「君は濡れてもいいのに、俺が濡れてはいけない理由はない」
「ですが」

「草むしりは終わりだ、ルティエラ。こちらに來い」
「困ります……っ」

マントに包まれ強引に抱き上げられて、足が浮く。レオンハルトの金の髪が、雨で濡れている。金属製の仮面の下から、雨の雫が滴り落ちていく。

「騎士様、私は雨に濡れるのが好きなのです。ですから」

「冷えると、体に障る。ルティエラ——俺の言うことを聞け」

「っ……あ」

反論を許さない低い声に囁かれて、どうしてか、ぞくりとした甘い刺激が背筋を走った。ルティエラは唇を結び、吐息を漏らさないように耐えた。

——触れる手の感触や、レオンハルトの硬い体に、琴線に触れるなにかがあるようだった。

城から裏庭に続く広いエントランスにある長椅子に、レオンハルトはルティエラを座らせた。それからルティエラの前に膝を突くと、軍服の胸から取り出した赤いポケットチーフでルティエラの濡れた髪や顔を拭く。

ルティエラは身を硬くしながらそれを受け入れた。拒絶の言葉は喉の奥に張りついて、出てこない。肌をポケットチーフが撫でるたびに妙な感覚が体を襲い、それを表情や声に出さないようにすることで精一杯だった。

首に布が触れて、レオンハルトの動きが一瞬止まった。そこには昨日の鬱血の痕がある。なにかに問われる前に、ルティエラは小さな声で言い訳をした。

「それは、虫に。草むらは、虫が多くて」

「……虫、か」

クレスルードはそれでごまかせたのだが、レオンハルトはなにか言いたげにそう繰り返して、首筋の赤い痕に指先で触れた。

「騎士様、あの……」

「こちらも、虫に？ 服の下まで刺されたのか」

メイド服の白いブラウスが、水に濡れて体にびったりと張りついている。

公爵令嬢だった時代は、コルセットやガーターベルトまでしっかり身につけていた。下着も、最高級のものであった。だが今は支給された簡素な木綿の下着の上下を身につけているのみだ。それが妙に気になった。

ブラウスの前あわせをぐいっと指で引つ張って、レオンハルトはルティエラの首から鎖骨、胸の上までを拭いた。

雨に濡れた白い肌の上には、虫に刺されたというには無理があるほどの、赤い痕が散っている。

「騎士様……お願いです。もう、これ以上は」

「ひどい毒虫もいたものだな。これでは、痛いだろう？」

「痛くはありません」

「そうか。本当に、虫か？」

レオンハルトの指先が、ルティエラの首に触れる。

無骨で硬い指の、皮の厚い腹が、確かめるように首筋の鬱血の痕を辿る。

ルティエラは僅かに眉根を寄せて、目を伏せた。

心配をしてくれているだけなのに、指先の感覚を意識してしまっているのが恥ずかしい。

「騎士様、お戯れを……いけません、私などに、触れては」

「ルティエラ・エヴァートン。エヴァートン家の花。どのような身分に落ちようとも、君の人としての輝きは損なわれない。私などと、言うものではない」

「ありがとうございます。優しいのですね、騎士様」

女嫌いだという噂は嘘だったのだろうか。レオンハルトはずいぶんと優しい。

それぐらい、雨の中で草をむしるルティエラの姿が哀れだったのかもしれないが。

レオンハルトは、ルティエラからすつと手を離して、それからポケットチーフを渡してきた。

ルティエラはぎゅつとそれを握り締めて、それから遠慮がちにレオンハルトに手を伸ばした。

濡れた金の髪や、頬にポケットチーフを当てる。

男らしい首筋や喉仏、顎の形がとても綺麗だ。薄い唇や、白い頬も。

仮面で顔はわからないが、きつと美しい顔立ちをしているのだろうか、口元や顎の形、耳の形から推測できる。

「俺のことは、気にしなくていい」

「ですが、騎士様も濡れていますので」

きつと、仮面には触れないほうがいいのだろう。

素顔を隠したい、深い理由があるのだろうか。

頬や首や軍服を拭いていると、レオンハルトはルティエラの腕を掴んだ。

「もう、いい。悪いな」

「いえ。私のせいで濡れてしまったのです」

ルティエラの腕を掴んでもまだ指が余るほど大きなごつごつした手と触れる体温を感じて、妙に落ち着かない気持ちになる。

頬が勝手に染まり、ルティエラはレオンハルトから視線を逸らした。

雨はまだ降り続けている。

内包された悪意にさえ目を瞑れば、それはただの雨だ。

裏庭の一方所だけに降る晴天の雨は、まさしく奇跡としか言いようがなく、美しい光景だった。

「こういったことは、度々あるのか？」

「……度々ではありません。これで、二度目です」

「以前はなにをされた？ 俺は長らく、国境の砦に駐屯していた。——昨日、帰ってきたばかりだな。君や殿下や聖女のごことは、人づてに聞くだけだった。だが、こんなことになっていたとは」

「仕方ないのです。私は恪気から、聖女様に嫌がらせをしました。聖女様は私を恨んでいらつしやるのです。自業自得です」

「本当にそうか？」

「……本当に」

なにも、していない。だが、それを言ったところで、なんになるのだろう。

ルティエラは、レオンハルトを自分の事情に巻き込みたくない。

この雨宿りは、昨日の一夜の過ちと同じだ。

すぐに失われる人の温もりは、ルティエラにとってはとてもありがたいものだった。

ルティエラにできることは、優しさを大事に抱えて生きていくことだけだ。多くを望んではいけない。

「君は、あまり他者に嫉妬をするような女性には見えなかったがな。それで、一度目はなにを？ 聖女は君になにをした？」

「……雪が降りました。雪も、綺麗でした。聖女様のお力は、とても素晴らしいものですね」
明るく、ルティエラは言った。これ以上色々ごまかすことは難しいと感じたからだ。

レオンハルトには嘘ばかりついてしまったので、これ以上嘘を重ねたくないということもあった。
「雪の中で草むしりを？」

「はい。雪ぐらいたいしたことはありません。そのうち冬が来ます。そうしたら、毎日のことになるのですから」

「なんて残酷なことを」

「騎士様。……もう、構わないでください。私は大丈夫です」

「君はそればかりだな。助けてと、なぜ言わない」

「私は、本当に……悪女なのです。……虫に刺されたというのは嘘です。私は、多くの男性に体を許しているのですよ。これは、その証です」

ルティエラは、ぐいっと自分のブラウスを引っ張って、赤い痕を見せつけた。

噂通りの悪女だとレオンハルトが呆れて、ここから立ち去ってくれればいいと思った。

これ以上の優しさはいけない。レオンハルトに余計な迷惑をかけたくない。心配も優しさも、ルティエラにはもつたない。過ぎたものだ。

「ああ、そのようだな」

レオンハルトは怒りもせず、嫌悪もせずにならずくと、その赤い痕の上から強引に首筋に噛みついた。

「……っ」

「俺にも体を許してくれるか、ルティエラ」

「ご、ご無体を……いけません。騎士様には、ふさわしい方がいます」

ぴりっとした痛みが首筋を走り、それからすぐに優しく舌が首筋を撫でるように辿った。

湿って、あたたかく、ぬるりとしたものが皮膚を這う感覚に、ルティエラは体を竦ませる。

「騎士様、駄目……っ」

「……男に慣れている女の反応ではない。それぐらいは、すぐにわかる」

「え、演技です……」

「君は嘘をつくのが下手だ。そして俺は、嘘を見抜くのが得意だ。相性がいいな」
この方は、一体なにを考えているのだろう。

どうして、こんなことを――

レオンハルトは、軽く首筋に音を立てて口づけて、再びルティエラを抱き上げた。

「今から君を部屋まで運ぶ。君は意識を失った振りをしていろ」

「騎士様、私は」

「ルティエラ。俺の言うことが聞けないのか？」

「それは……」

「俺に従え」

「……はい」

命令をされると、どういうわけか、少し苦しくなった。

それがどういう苦しさなのか分からない。胸がドキドキして、体が緊張するような――妙な感覚だ。

レオンハルトはルティエラを抱き上げて堂々と城の中を歩いた。

まだ雨の雫に濡れるふたりの姿に、それから抱えられているのがルティエラだという事実には、皆がぎよつとした顔をしてレオンハルトを凝視している。

だが、レオンハルトが怖いのか、誰も声をかけるものはいない。

懲罰局に向かうと、レオンハルトは驚いた顔をしているクレスルードに「裏庭に様子を見に行つ

たら、雨に降られて倒れていた。熱があるようだ」と伝えた。

「熱が？」

「ああ。半年も休みなく働かせていたのだろう？ 久々の休日をもらい、気がゆるんだこともあるのだろうが、雨に濡れて体が冷えて、熱が出たようだ。部屋まで送る。明日は休みに」

「医者を呼びますか」

「俺がいれば医者は不要だ。殿下や聖女がなにか言ってくるようなことがあつたら、苦情は全て俺に言うように伝えておけ」

「わかりました。悪女よ、レオンハルト様に感謝することだな」

レオンハルトの腕の中で、ルティエラは意識を失った振りをしていて。

クレスルードに話しかけられたが、返事はできなかった。レオンハルトに命じられていたからだ。なんだかそうしていると、本当に熱が出てきたような気がした。

人の行き交う長い回廊を歩きながら、レオンハルトは「君の部屋はどこだ」とルティエラに尋ねる。

ルティエラは使用人の部屋の一先端だと答えた。

使用人の部屋は城の一階の奥にあり、男性の使用人は東側に、女性の使用人は西側にと、居住区域は分かれている。ルティエラの部屋はその中でも一番小さい。簡素なベッドとクローゼットがあるだけの部屋だ。

夕方仕事を終えるまでは、部屋に入ることなどない。ただ眠ることだけでできればそれで十分で、

部屋が狭くてもベッドが硬くても、困ることはなかった。

ルティエラの立場を考えれば、「雨風を凌しのぎ上げてベッドがあるだけで最上である。

牢獄で寝泊まりしろと言われるかとも考えていたので、部屋を与えられた時には安堵したことを覚えていた。

レオンハルトはルティエラの部屋に入ると、「まるで物置だな」と呟いた。

それから、抱き上げていたルティエラを床に下ろした。

包んでいたマントを取り払い、壁にひとつだけあるフックにかける。それから雨に濡れたルティエラのメイド服姿を、思案するようにじっと眺めた。

「濡れた服でベッドに座るわけにもいかない。ルティエラ、服を脱げ」

「……それは、できかねます」

「数々の男に体を許しているのなら、造作もないことだろう？」

レオンハルトは優しく親切な男かと思ったのに、どうして意地の悪いことを言うのだろう。確かにルティエラは嘘をついた。その嘘を嘘だと見抜いた上で、そんな風に言わなくてもいいのにと、ルティエラは戸惑う。

自ら、男性の前で服を脱ぐなんて。助け出してくれたことには感謝をしているが、そんなことはできない。

「騎士様、どうかお許しを。できません」

「湯と布を用意してくる。俺の目の前で脱げと言っているわけではない。なにを勘違いしている？」

抱かれるとも思ったのか

「……っ」

「昨日はずいぶんと激しかったようだな。君の相手の男は、嫉妬深いようだ。これは、支配欲の表れ。知っているだろうか？」

首や鎖骨、薄い皮膚の上に散っている赤い印を撫でられて、ルティエラは困り果てて目を閉じた。

「——まだ、足りなかったか？」

耳元で囁かれて、体に緊張が走る。

数々の男を受け入れたという事実はないが、ルティエラは見知らぬ男と過ちを犯した。

それを覚えていないとは、とても言えない。

今さら守るべきものなどはないが、人並みの羞恥心はある。

「お戯れは、おやめください……」

「相手の男が不憫ふびんだな。これほど激しく愛し合ったというのに、虫——と、言われるとは」

「それは……他に、なんと言っているのかわからなかったのです。まさか、男性に印を残していたのだとは、言えませんか」

「そうしてごまかすほどに、都合の悪い相手だったのか？」

「それは……」

うつむくルティエラの耳に、レオンハルトの指が触れる。耳朶を弄ぶように撫でられた。それだけのことなのに、腰から下の力が抜けて、座り込みそうになってしまう。

(私は、どうしてしまったのかしら……。それに、どうして騎士様は、意地悪をするのだろうか)
「体を拭いて着替える。脱いでおけ、ルティエラ。それとも脱がせてほしいか？」

「ひとりで、脱げます。騎士様、お湯は自分で。それに、布も。あとはひとりで大丈夫です」

「君は熱が出ていて、俺は看病をしている。君を放つて俺が仕事に戻れば、嘘がばれる」

そう言い残して、レオンハルトは部屋を出ていった。

ひとり残されたルティエラは、のろのろと服を脱ぎだした。濡れた服は体に張りついて脱ぎにくい。

(昨日から、なんだか変だわ。お酒を飲んであんなことをしたせいで、天罰がくだったのかしら……)

そんなわけはないのだろうが、そう思わずにはいられない。

レオンハルトはユースティス家の現当主だ。

ユースティス家はエヴァートン家と敵対しているから、レオンハルトはルティエラに個人的に思うところがあるのだろうか。

けれど、雨の中から助けてくれた。そこには確かに優しさがあった。

ルティエラが見知らぬ男と関係を持っているのだと思い、軽蔑けいべつしたのだろうか。

それなら仕方がない。実際、酔って体を繋げたのだから。

貴族社会においては、男性の火遊びは勲章のひとつだが、女性の火遊びは軽蔑の対象になる。

(仕方ないわよね。それでも、助けてくれたのだから、ありがたく思わないと)

せつかく優しくしてくれたのに、嫌われてしまうのは苦しい。

それでもレオンハルトはルティエラを見捨てないのだから——なにを言われても甘んじて受け入れるべきだろう。

それに、レオンハルトに命令をされると、どうにもそわそわして、足の力が抜けそうになってしまう。

服を脱いでいる今も、意識をすると——甘い溜め息が漏れそうになる。

これでは本当に——物足りないと思っっているようだ。

昨日の快樂さえ、なにも覚えていないのに。そんなに、好かったのだろうか。できれば昨日に戻って思い出したい。彼が誰なのか、どんなことをされたのか。

「きちんと脱いで待っていたな。いい子だ」

レオンハルトはすぐに戻ってきた。銀のカートには湯桶と、布が用意されている。

褒められて頬を撫でられると、その手に頬を擦りつけたくなってしまふ。

本当に——おかし。

ルティエラは体を隠すために、せめてと、エプロンを体に巻きつけていた。

レオンハルトはエプロンに指をかけて引つ張る。胸が露わになりそうになり、ルティエラはエプロンを押さえた。

「なぜエプロンを？」

「服は、少なくとも。エプロンなら、何枚かありましたので」

「まあいい。それはいらぬ。外せ」

「騎士様、それは……できません。どうして辱めようとなさるのですか？」

「さあ。なぜだろうな」

エプロンをぎゅっと握り締めたが、ルティエラの体はレオンハルトによって簡単にベッドに押し倒された。エプロンが剥ぎ取られて、均整の取れた美しい体が露わになる。

公爵令嬢だった時は、ドレスが似合わなくなるからと食事の管理を徹底されていた。

今の食事は質素だが、労働して食事をきちんとしてついているために、体つきはむしろ健康的になっている。

豊かな胸に、細い腰に、形のいい足。

それら全てが、初めて言葉を交わしたばかりの男の前に露わになっている。

白い肌に金の髪がゆるやかに落ちる。体を小さく丸めてレオンハルトの視線を避けるが、隠しうがないためあまり意味をなさなかった。

「ルティエラ、大人しくしている」

「……はい」

レオンハルトは布を湯桶に浸して絞ると、丁寧にルティエラの顔を拭く。

あたたかい布で顔を拭かれるのは心地がよく、こんな状況だというのに思わず目を細めた。

「熱くは？」

「ないです」

首や、指先。腕や背中を丁寧に拭かれて、それから胸や腹を拭かれる。

羞恥は感じるが、それ以上に気持ちよかった。

レオンハルトの手つきは辱めようとするのではなく、純粹に看病をしているのだと感ぜられるものだった。

足の指を一本一本拭かれて、ふくらはぎを撫でられる。

太股の内側に散った赤い印を撫でられて、それから鼠径に。

「つ、あ……ごめんさい、私……」

下生えのほとんどないつるりとした秘所にあたたかい布が当てられて、ふるりと体が震えた。

「——昨日、ここに幾度出された？ 男の精を受け入れれば子ができる。君はそれを理解しているのか？」

「わ、わかっています。それぐらいのことは……」

「では、子ができたらどうする？」

「私は罪人ですから、ひとり育てます」

「相手の男は？」

「迷惑はかけられません」

大事などころを丁寧に拭かれて、ルティエラはきつく目を閉じた。

優しい手つきはただ拭いているだけのものなのに、背徳的な罪悪感と甘美さと羞恥心で頭がちやごちやになって、涙がにじんだ。

「ルティエラ。起きろ」

「は、はい」

服をすつぽりと被せられて、それから髪を撫でられる。

「どうして、君は……」

「騎士様……?」

「まさかと思うが、昨日の男のことを、覚えていないのか?」

「……お酒に、酔っていたのです。軽蔑、なさいますよね」

レオンハルトは深く息をつくど、それからルティエラの目尻を指先で辿り、立ち上がった。

「顔も、覚えていないのか?」

「朝目覚めた時に顔は見ました。けれど、どなたかは存じ上げなくて」

「その顔を見て、なにか感じなかったか?」

「綺麗な方でした。だからきつと、男娼の方だと思っただけです」

「……男娼?」

「はい。……破瓜の痛みがあればきつと、覚えているものでしょう。ですから、とてもお上手だったのだらうと。騎士様、こんな話は私もう、とても……」

なぜこんなことをレオンハルトに話さなくてはいけないのか。

羞恥に首までも赤く染めて、ルティエラは足元までを覆う寝衣を掴んだ。

レオンハルトは「今日はもう外に出るな。食事は部屋に後で運ぶ」と告げて、カートを引いて部

屋から出ていった。

夕方、約束通りレオンハルトはルティエラのもとに食事を届けた。

それは野菜スープと硬いパンではなく、ポルチーニ茸とチーズのリゾットと、温野菜だった。

昨日の酒場での食事を除くと半年ぶりの野菜スープではない食事は、美味しかった。

何度も礼を言いながら食事をするルティエラを無言で見守った後、レオンハルトは食器を引き上げて出ていった。

出ていく間際、「明日は休むように。一日寝ている」と言われたので、大人しくうなずいた。

——レオンハルト様は、どういう人なのだろうか。

ユースティス家の嫡男として生まれて、今は公爵になっている。騎士団長の地位にいるのは、ユースティス家が古くから王国の守護を務める家柄だからだ。

そういったこともあって、同じ公爵家であるルティエラの家は、王家との繋がりを重要視していた。ユースティス家に負けないように、生まれたばかりのルティエラを王子アルヴァアの婚約者にと推薦したのかもしれないと、今にしてみれば思う。

レオンハルトはどうして仮面をつけているのだろう。きつと美しい顔をしている気がするのにな。どうして、優しくしてくれるのに、からかうようなひどいことをするのだろう。

そればかりを考えていると、いつの間にか眠っていた。

日頃の疲れが出たらしく、翌目覚めるともう昼も過ぎていた。

久々に、こんなに眠った。気づくとベッドサイドに小さなテーブルが運び込まれていて、そこには林檎や葡萄などの果物と、エビとアボカドとオリーブが挟まれたパン、葡萄酒に、カップケーキなどが置かれていた。

『目覚めたら、食べるように』

綺麗な文字で書かれた手紙が、葡萄酒の下に置いてあった。レオンハルトからの手紙だ。

手紙を読んで、ルティエラは顔を赤くした。

昨日、赤裸々に一夜の過ちをレオンハルトに話したことを思い出す。

——恥ずかしい。

ルティエラはそろそろと部屋から抜け出すと、共同洗面所に置いてある水瓶の水で顔を洗って、口をゆすいだ。時刻は昼下がり。まだ、使用人たちは忙しく働いている。

こんな時間に使用人部屋に戻ってくる者はいない。

他の使用人たちは、ルティエラが姿を見せるとあからさまに嫌な顔をする。頭から水をかけられたり、部屋にゴミを投げ込まれたりしたこともある。嫌われていることに関しては、あまり気にしていなかった。ルティエラの両親や他の貴族たちに比べたら、使用人たちの鬱憤ばらしなど可愛いものだ。

ルティエラは挨拶を欠かさなかったし、いつも笑顔だった。そうしていると、嫌がらせも少し減った。それでも、誰もいないというのは気が楽だ。

部屋に戻って、レオンハルトからの贈り物をありがたくいただいた。

どれもこれもが美味しくて、食べているとぼろっと涙がこぼれた。

悪意はいくらでも受け入れられるけれど、不意の親切というのは、張り詰めていた緊張の糸が切れてしまうようで、悲しいわけではないのに感情が溢れてしまう。

「美味しい……」

——明日からも頑張ろう。

翌日。一日ゆっくり眠ったためだろうか、ルティエラは朝からやる気に満ちていた。

懲罰局に向かうと、そこには難しい顔をしたクレスルードが腕を組んで待っていた。

「おはようございます、クレスルード様」

「悪女。レオンハルト様となかあったのか？」

「なにか……？」

「レオンハルト様は数日前に、国境の駐屯地から帰ってきたばかりだ。この三年は、反王派の内乱の鎮圧にかかりきりだった」

「ええ。存じ上げております。王弟ベルクント様が、アルヴァロ殿下の弟君レドリック殿下を擁立して王に反旗を翻そうとしているという噂が流れておりました」

アルヴァロには王になる素質がない——と、王弟ベルクントは言っている。

そのため、まだ幼いレドリックを擁立して、アルヴァロを引きずり下ろすつもりである。

そんな噂を、ルティエラは知っていた。

真偽はわからない。きっとアルヴァロは傷ついているだろうと考えていたが、彼とその話をした

ことはなかった。

「よく知っているな。まあ、知っていて当然か」

「辺境伯リユーゼ様にも謀反むぼんの疑いがあるとして、レオンハルト様はリユーゼ様との対話と、カルア地方で起こった内乱の鎮圧をされていたのですよね」

「ああ。ようやく片づいて、数日前に帰ってきたばかりだ。そのレオンハルト様が、なぜお前を気にかける？」

「それは、私にもわかりかねます」

「同じ公爵家の生まれだから、親しかったのか」

「そんなことは……私は、アルヴァア様の婚約者でしたので、他の男性と言葉を交わすことは禁じられていました」

クレスルードは胡散臭そうに、ルティエラの様子を上から下まで眺めた。

「熱はいいのか？」

「休ませていただいたおかげで、すっかり元気です」

「ならばいい。レオンハルト様がお呼びだ。騎士団の執務室に行く。ついてこい」

クレスルードに促されて、ルティエラは騎士団の執務室へ向かった。

騎士団本部は、城の敷地内にある。宿舎と訓練所、厩うまやなどがあり、五十名ほどが常駐している。各地の警備や任務についている者たちを全て合わせると、三百を超える人数になる。

国王トーラス直属の騎士団である。

レオンハルトが三年王都を留守にしていた原因である、トーラスとベルクントの対立がはじまったのは数年前のことだ。王弟ベルクントは、まだ幼いレドリック王子を連れて、住んでいた屋敷を捨ててどこかに姿を隠した。

レドリックは国王トーラスと——ベルクントの妻の子だと、言われている。

トーラスはずっと、弟であるベルクントの妻に横恋慕よここぼしをしていた。

強引に想いを遂げられたベルクントの妻は、レドリックを産んだ後に、心を病んで死んでしまったのだと聞いた。

——残酷な話だ。しかしただの噂である。

トーラスは、レドリックは自分の子だと言っているが——トーラスとベルクントの妻がどのような関係にあったかまでは公表されていない。

貴族の間で囁かれている噂が事実だとしたら、ベルクントが反乱を起こす理由には十分すぎる。

「来たか、ルティエラ。顔色がよくなったようだ」

「騎士様のおかげです。いくら感謝しても、足りないほどです」

「熱は下がったのだな」

「はい」

執務室の立派な椅子にゆったりと座っているレオンハルトが、淡々とした口調で尋ねてくる。ルティエラは恐縮しながらうなずいた。

「クレスルード、ルティエラには伝えたか？」

「いえ。今からです」

「では、話せ」

「はい」

クレスルードはルティエラに向き直る。

「ルティエラ。懲罰局はお前に、残りの四年と半年の懲罰として、レオンハルト様の専属秘書を命ずる」

ルティエラはにわかに目を見開いた。

第二章

——専属秘書。

そんな立場、聞いたことがない。

口元に笑みを湛えるレオンハルトのことが、ますますわからなくなってしまった。

下がっていいとレオンハルトに言われて、クレスルードは「それでは」と立礼をした。

なにか言いたげにルティエラを見ていたが、結局なにも言わないままだった。

「クレスルード様。半年間、お世話になりました」

「別に、世話はしていない。レオンハルト様。私は納得していません。なぜ悪女をそばに置くのですか。この女は聖女様に対して数々の不敬を——」

クレスルードが忌々しそうに言う。彼の態度からして、この処遇はレオンハルトの一存で決められたものなのだろう。

「クレスルード。余計な会話は不要だ。俺はお前と議論をする気はない」

「はい」

レオンハルトが冷たい声音で言う。クレスルードはびくりと震えて青ざめた。それから執務室から出ていった。

——広い部屋である。壁一面に棚がある。棚には乱雑に、書類や本が詰め込まれていた。何本もの剣が積み重なるように置かれていて、黒い革張りのソファセットに備えつけられた重厚感のあるテーブルにも、書類が大量に積まれている。雑然とした部屋だ。

「ルティエラ。こちらに來い」

部屋の様子を眺めるルティエラに、執務機の椅子に座っているレオンハルトは、そばに來るように呼びかけた。

「今聞いた通り、君は俺の秘書になった。有能なエヴァートンの花に草むしりをさせるのはとても惜しい。留守にしていた数年で、事務仕事が溜まっていてな。ひどい有様だろう」

「ええ、確かに……」

「戦の後は処理が山積みになる。怪我人には見舞い金を、功績には報奨金を。騎士団に渡されている運営費や寄付金などを合わせて、計算と支払いをしなくてはいけない」

一体なにをされるのだろうか。と少し警戒していたルティエラだったが、レオンハルトは仕事の話が続ける。

「前々から、補佐官が欲しいと思っていた。君ならば、十分俺の補佐ができる。騎士たちを遊ばせているわけにもいかない。仕事の割り振りもしなくてはならないしな」

「それは全て、騎士団長様が行っているのですか？」

「他の者に任せていたら、この状況だ。血の氣の多い騎士たちは、せっかく雇った文官を小馬鹿にする。有能なものは皆、逃げる。まったくどうしようもない」

——特に、レドリック殿下のことがあつてからは。

そう、眩くようにレオンハルトは言つて、それから嘆息をした。

「ルティエラ。君にはまず、溜まりに溜まった書類の確認をしてもらう。この部屋の掃除や、俺の世話も君の仕事だ。常に俺に従い、共にいろ。それが君への懲罰だ」

「……騎士様。それでは、きつと殿下と聖女様がお怒りになります」

「怒らせておけばいい」
「ですが」

レオンハルトは立ち上がると、ルティエラの腰に手を回して、ぐいっと引いた。

倒れそうになったルティエラは、執務机に強引に押し倒される。硬い机が背中に当たり、足が浮いた。

メイド服のスカートごと足を抱え上げられて、両足の間にレオンハルトの腰が近づく。覆いかぶさられると、レオンハルトの金の髪が顔に触れる。

仮面の奥の瞳は、至近距離でもよく見えない。

「ルティエラ。クレスルードを名で呼んでいた。なぜ、俺は騎士様と？」

「それは……」

「名で呼べ。これは命令だ」

「……レオンハルト様」

「もつと懲罰が欲しいというのなら、俺の性奴隷にでもなるか？ クレスルードも他の騎士たちも、

立ち読みサンプル
はここまで

そう考えている。秘書官というのは名目で、専属の娼婦をそばに置くのだとな」

ルティエラは目を見開いた。確かに、それならば懲罰としてふさわしい。

けれど、なにかが違う。レオンハルトがそうしようと思えば、ルティエラを穢せる瞬間はいつでもあった。しかし彼は、甲斐甲斐しくルティエラの世話をしてくれたのだ。

「レオンハルト様は……なぜ、私に構うのですか？」

「なぜとは？」

「皆が、私を罪人だと信じているのに。おそばに置いてくださるのは、私を守るためですよね？ 聖女様から、なにかされないように」

言葉を奪うように、強引に唇が重なる。

驚きと混乱で反射的に逃げようとしたルティエラの腰と両手を押さえつけて、レオンハルトはルティエラの唇の間に、分厚い舌を振じ込んだ。

口の中がいっぱいになり、息苦しさを感じる。濡れた舌がぬるりとうごめき、ルティエラの舌を搦めとった。

——自分のものではない舌が、口の中に入っている。

その背徳感と違和感に、そしてのみ込むことのできないものが口の中にあるという異物感に、くらくらしした。

ぬるぬると擦りつけられて、逃げようと引っ込めた舌を追いかけて、食べるように舐られる。粘膜が擦れ合う感覚が、違和感ではなくぞわぞわした甘いなにかに変わっていく。

「ふ、あ……っ」

呼吸ができない。こんなに、近い。互いの境界が曖昧になるほどに近くにいる。

薄く目を開くと、視界がぼやける。鼻が触れ合い、体が重なり合っている。

分厚く長いレオンハルトの舌が荒々しくルティエラの小さな舌を舐り、口蓋をくすぐるように撫でられる。途端に、背筋に甘い痺れが走る。そこにスイッチがあるように、体の力が抜けた。

「ん、んう……」

体温が上がり、白い頬が赤みを帯びる。

切なげに眉根を寄せて、ルティエラは助けを求めるように、レオンハルトの服を掴んだ。

「ん、あ、んう……っ」

こんなことはいけないのに、嫌だと思わない。息が苦しくて顔を背けようとする、さらに深く唇が重なった。

抱き締められて、レオンハルトの重みを感じる。胸板で、胸が潰れている。

自分のものではない唾液が口に溢れる。口角から、唾液が滴る。

恥ずかしい。でも、気持ちいい。口の中をいっぱいにされて、舌で撫でまわされることが。

乱暴に水音を立てながら、舌を絡めて吸われるのが。

——この感覚を、知っている。

口の中にあるなにかを探すように、しつこいぐらいに口腔を貪られて、ルティエラは苦しくなつてレオンハルトの服を引っ張った。酸欠で、頭がぼんやりする。